

「地球の健康」 考え植物性に

スーパー
は、ビーガ
ンパク質由
る30年ま

でに20%に引き上げる目標を掲げた。欧州を中心に31カ国で実施する。動物性から植物性にシフトすることで、気候変動や生物多様性、健康問題などの課題に対応する。

取り組みの根底には「フライング・ヘルス・ダイエツト」がある。これは、16カ国から集まった食や環境の専門家による研究チーム「イート・ラシメント委員会」が提唱する



1皿の半分を野菜と果物、残りの大部分を植物性タンパクや全粒穀物で摂取

ガイドラインだ。

パリ協定1.5℃目標と50年に100億人と予想される人々の健康的な食を両立させるため、1日に必要な2500キ

カカオ収穫減、気候危機と貧困で

米国の研究機関「クライメート・セントラル」は2月、西アフリカの「カカオベルト」と呼ばれるカカオ豆産地に関するレポートを公表。世界の生産量の約7割を占める4カ国（ガーナ、コートジボワール、カメルーン、ナイジェリア）で、収穫量が大幅に落ち込んでいると報告した。

ガーナとコートジボワールでは、過去10年間でカカオの生育最適気温の上限である32℃を超えた日が増加。2024年は気候変動の影響がない場合と比べて、年間6週間以上も増えていた。

ロカロリーを植物性タンパク質や全粒穀物主体の食事で賄うよう定める。

さらに、温室効果ガスや土壌・水質汚染を抑えるため、環境再生型農業などの生産方法の必要性を唱える。

元々カカオ豆栽培の利益率は低く、農地を手放し手っ取り早く収入が得られる金の採掘に手を出すケースも後を絶たない。ガーナには西アフリカ有数の金鉱脈があるが、採掘による土壌汚染も収穫減少に拍車をかける。

Aー活用ソフトで家庭菜園サポート

パソコン用ソフトウェアの企画・開発・販売を行うFREEDCS（フリークス、東京・港）は2月20日、栽培計画サポートソフト「おまかせ家庭菜園」を発売した。

除草ロボで有機農業を後押し

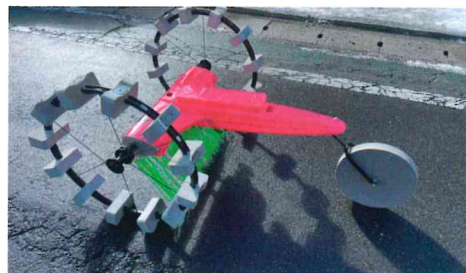
IoTやAIによる農業機器の開発を行うハタケホットケ（長野県塩尻市）は、水田除草ロボット「ミズニゴール」の2025年モデルを発表した。水田の中を走り回り水を濁らせることで、稲の栄養を奪う雑草の光合成を遮り、除草作業の負担軽減を図る仕組みだ。

2025年モデルは衛星システムの採用で自動運転の精度を向上させたほか、耐久性・耐水性の向上や軽量化を図った。

「ミズニゴール」は、後継者不足や耕作放棄などの課題を抱える小規模農家の声を受けて開発。現役で農業と子育てを行うハタケホットケ社員が、農家へのヒアリングを行って改良を重ねた。

スマートアグリ技術によって除草作業の重労働を軽減することで、

除草剤や農薬・化学肥料への依存から脱却し、有機農業へのシフトを後押しすることも期待できる。本製品は、内閣官房主催の「イチ Biz アワード」最優秀賞を受賞した。



GNSS(全地球航法衛星システム)を採用

畑の形を作画し、作物を選択することで栽培計画が完成。不明点やトラブルはAーチャットで質問するが、最適な回答を引き出すためのテンプレートも備える。栽培計画の参考に、菜園のある場所の気象データを気象庁のホームページからダウンロードもできる。

格の高騰による家庭菜園のニーズの高まりがある。高齢者の使いやすいさを考慮してスマホでなくパソコン専用（Windows・ダウンロード販売）とした。

同社広報担当の佐藤真知子氏は「高齢者にとって野菜価格の高騰は深刻な問題。家庭菜園を通じて心と体の健康に貢献したい」と説明する。

【お知らせ】次号から農業トピックスはオンラインに移行します。